

昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一〇三号）

目次

- 親鸞聖人の德音……………近角常観…（1）
こゝひとつといふところ……………花田正夫…（6）
大経結びの段……………福島政雄…（10）
祖父の形見……………田中克巳…（12）

慈

光

第九卷

第十號

親鸞聖人の徳音 (一)

近角常観

註、明治四十五年二月発行『求道』

第九卷第壹号より転載

今日（明治四十四年十一月二十六日）は、親鸞聖人の六百五十年の御正忌であります。我々幸にも値ひ難い仏法に値ひ、殊に尊き親鸞聖人の御化導の趣きを頂く事が出来るは、実に聖人の仰せにもある如く

値ひ難くして今遇ふことを得たり、

聞き難くして已に聞くことを得たり。

一通りのことでは無い。又覚如上人は『式文』の初めに弟子、四禅の練の端に、たま〜南洋人身の針を貫き、曠海の浪の上に、希に西土仏教の查に遇へり。と仰せられて、実に値ひ難く得難き、一通りならぬ御法に遇ひ、殊に今日、聖人の六百五十年の御正忌に遇はせて

貰ふことは、実に有難い極みであります。

就きまして今日の題は『親鸞聖人の徳音』として置きました。之は御存じの如く、同じく『式文』の中に

哀れなるかなや、恩顔は寂滅の煙に化したまふと雖、

真影を眼前に當め、徳音は無常の風に隔ると雖、実語を耳の底に胎す。

とお喜びなされ、それを又蓮如上人は『御文』の中に夫、聖人御入滅は、すでに一百余歳をふといへども、かたじけなくも目前に真影を拜したてまつる。又徳音は、はるかに無常の風にへだつといへども、まのあたり、実語を相承血脉して、あきらかに耳の底にのこして、一流の他力真実の信心、いまにたえせざるものなり。

と。『式文』そのまゝをお示しなされてある。そこで今

日は特に『親鸞聖人の徳音』として、聖人ちぎ〜の御言葉を頂きたいと、此の題を選んだのであります。

さて『教行信証』を初め、聖人の御教化は沢山ありますけれども、さりながら、いつも私は『歎異鈔』を頂くたびに思ふのは、

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよく〜案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんと申し召したちける本願のかたちけなさよと、御述懐さふらひしことを云々。

この一句が、親鸞聖人、口を開けば常にこれを仰せられたから、斯くあるので無いかと思ふのであります。

凡て人には、その人／＼の常に繰り反す言葉といふものがある。蓮如上人の『御文』を頂けば、何処にもほとんど決まつてあるお言葉がある。曰く、

南無といふは、衆生の阿弥陀仏、後生助け給へと、頼みまふす意である。

又阿弥陀仏といふは、そのたのむ衆生を知ろし召して、その御身より八萬四千の大明明を放ちて、その者を撰取して捨て給はぬお意である。

と。これが蓮如上人のきまつてある常の御教化である。

八十通の『御文』どれを頂いても、皆このお言葉がある。

その如く、親鸞聖人御在世の当時、ことに関東で言へば稻田において、又京都としては、関東からわさ〜十余ヶ国の境を越えて来た人達に対して、聖人の常に仰せられたお言葉、所謂世間でいふ口癖に仰せられたお言葉が

「聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願を……………」

……かたじけなさよ」

と、即ちこれ、あなたの御述懐のお言葉である。思ふに数年前物故せられた播州の後藤祐護師は、念仏のあいま、

「あゝ自分は悪僧ぢや。大悪僧で御座ります」

といふ言葉を、常に口癖のように独言に言はれた。この方は一日に六万遍も念仏を称へられた有難き御方であつたが、その念仏の間々に

「あゝ悪僧は大悪僧で御座ります」

と思はず口をほとばしり出る。これが述懐の言葉である。もとより、他の聖人の御教化として、外に変わりやうは無けれども、殊に此のお言葉が、聖人の常の仰せとあり、口を開けばこの御一句を常に仰せられた如く頂かれて、実にこの一句は、如何程頂きても頂き切れぬ有難きお言葉であ

ります。

之は余りに言ひ過ぎになるかも知れませぬけれど、殊に『歎異鈔』の有難いのは、いつも、親鸞、々々、と御自分の名を出してお示し下さることが多い事である。『教行信証』の信巻の中にも

悲しい哉、愚禿鸞、愛慾の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜はず、真証の証に近づくことを快まず、耻づべし、傷むべし。

といふ御言葉もあり、又御消息等にも、御名を挙げさせられてのお示しも随分あるけれども、ことに『歎異鈔』にはそれが著しく、いつもあなたの御自督にかけ、あなたが直きくのお言葉として出てある所が多いのである。例へば、

親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられ云云。

親鸞は父母孝養のためとて念仏一遍にても云云。

親鸞は弟子一人も持たずさふらふ云々。

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり云々。

斯くの如くどこを頂いても、聖人が直きく現れて、お示し下さる様が見えるのである。殊に最後の今の御述懐の

お言葉の如き、勿論これは、今より想像し奉るのであるけれども、聖人が一人在らせられる時でも、又人にお話あらせられる時でも、感極りて

「あゝ弥陀の五劫思惟の願は、親鸞一人が為ぢや。

あゝこの親鸞は実に悪人ぢや。愛慾の広海に迷うてるして見やうなき大悪人ぢや。この仕様の無き親鸞の身を、助けんと思召し立ち下された本願の忝さ」

と、あなたが常に思ひ出してはお喜びの様が、実にこの一語で頂けるのである。

で、親鸞聖人、御一代の御苦勞を思ふと、此の一語が、御一代の何処へもひびき来るのである。

聖人が流罪にお遇ひなされて、一人、越後にお出でなされ、非常な難路を踏みて御化導下さる時も、聖人の心中はつねに「弥陀の五劫思惟の願を……かたじけなさま」と。聖人の心中は何時もこればかりである。

殊に日野左エ門の門前で雪中一夜の御苦勞の時も、聖人の御述懐は他の事は仰しやらぬ。矢張りこれに就けても、「弥陀の五劫思惟の願を……かたじけなさま」と、聖人の御一代は全くこの一語を以て一貫してするのである。して見れば、聖人九十年の御苦勞は、全くこの「弥陀の

五思劫惟の御苦勞」をお喜びなされる余りより現はれ来つたのであつて、謂ひ換へれば、親鸞聖人御一代の御苦勞は、即ち弥陀の五劫思惟の御苦勞が、直きくこの世に現れて下されたものである。斯くあなたが御一代の間に、弥陀の五劫思惟の御苦勞が有難いと喜んで御示し下された御言葉がこれであります。

そこで『式文』初めの御言葉に

「ここに祖師聖人の化導に依つて、法蔵因位の本誓を聴く歡喜胸に満ち、渴仰肝に銘ず。云々。」

この言葉が、今の「弥陀の五劫思惟……かたじけなさま」の御意である。覚如上人が親鸞聖人のこのお言葉を伝聞せられて、これをそのまま直ぐ『式文』の上に「ここに祖師聖人の化導に依つて、法蔵因位の本誓を聴く云々」と。これ実に親鸞聖人の御化導の賜であります。

話が色々になりますけれども、聖人の御化導に、何れおろかば無けれども、殊に『正信偈』は、仏恩の深遠なるを信知して作るとお示しあるのであるが、その『正信偈』も巻を聞くと直ぐに、

無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる

法蔵菩薩因位の時、世自在王仏の所に在して、

諸仏浄土の因、国土人天の善惡を覩見して

無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり

五劫に之を思惟し擬受したまふ。

重ねて誓ふらくは、名声十分に聞えん。云々。

と矢張り、法蔵菩薩の五劫の御苦勞からお始めなされてあるのである。

又、『歎異鈔』には、今の聖人の御述懐のお言葉に続けされば、忝くも、わが御身にひきかけて、我等が身の

罪惡の深きほどをも知らず、如来の御恩のたかきことも知らずして迷へるを思ひしらせんがために候ひけり云々。

と。聖人は自分はそのばくの業を持つて居る者である。

此の業を持つ親鸞の身を助けようとの五劫永劫の因位の御苦勞である。此親鸞の身を助けて下さるは、親鸞がこの仕様の無き罪業深重の者なればこそ、此の者を助けるとの広大な本願であるとお喜びなされる。その喜びは親鸞聖人御一人の為の喜びであるけれども、実は十方衆生皆同様の喜びなのである。同様の喜びであるけれども、今親鸞聖人が、自分は罪が深い、弥陀の五劫思惟の願は、実にこの仕

様の無き親鸞一人の為ちやとお喜び下さるは、即ち我々自分の身の悪も思はず、如来の御恩の高き事も知らずして迷ひ苦しめる者に、其のこちらが罪の深いために、長々苦勞して居て下さる親様のあることを自身に頂きて、我々に知らせて下さる事になるのである。

其処を覚如上人は『式文』に「ここに祖師聖人の化導に依り法蔵因位の本誓を聴く云々」とお示し下されたのである。

又蓮如上人『八ヶ条の御文』には

かるが故に、弥陀仏のむかし、法蔵比丘たりしとき、衆生仏にならずばわれも正覚ならじと、ちかひましますと、その正覚すでに成じたまひしがたこそ、いまの南無阿弥陀仏なりと心得べし。云々
斯く、弥陀の五劫思惟、法蔵菩薩の因位の御苦勞といふ、ここが他力真宗たる有難き所であります。

未 完

讚 歎 異 抄

歌人 吉野秀雄

うつし身の孤心の極まれば、歎異の鈔に絶りまうすも
若きより緝きなれし書なれど、今夜の我はおしいた
きぬ

歎異鈔読みゆくなべに聖人の鏡の御影おもかけにたつ
業深きわが身一人のためにこそ このよき書は今に残
れる

よき人の傷み哀しふ語りごと声さながらに伝はれるは
や

(註) 米国加州ストックトン仏教会機関紙

北条恵実師 発行

ここひとつといふところ

花 田 正 夫

め通りの聞法を続けてゐる。

すべて真実の仏道に徹しられた方々は、何かここひとつといふところを持つて居られて、終生そこを繰り返しくお説きになつて、なほ説きつくせないと言ふ趣がある。これは実に御親切の極みで、荒涼たる人生の砂漠で、緑蔭、清泉のオワンスを、倦まずたゆまず指示して下さつて、飢渴になやむ旅人を常に導いて、うるほし、満たして下さるのである。

蓮如上人は、仏法は、めずらしいこと新しいことを聞くのでも、またただ鷹揚に聞くのでもない。ここひとつといふかなめを聞き、かどをきけ、と勧められてゐる。又法を説く人にも、手みじかに、ひきよせて、かなめを説け、一念のところ、たのむ一念のところを、繰り返して言へとおつしやつて居られる。

そこに赤尾の道宗は「たゞ一つ御詞をいつも聴聞申すが、初めたるやうに有難き由、申され候」と、上人の御勸

さてこのことに関連して、白井成允先生のお話が思ひ浮ぶ。それは先生が御母堂を亡くされて、天なり、命なり、といふ儒教に安らぎを失はれ、次に聖書の中にも光を見出し得ないで、三好愛吉先生のお宅を訪うて、そのことを打ち明けられた。

すると 二好先生は、御自分は禪宗であつたが、
「白井さん、それなら仏教を聞きなさい。仏教でもあな
たは禪よりも浄土教が適すると思ふから真宗の教を聞くと
よい。それには求道会館で毎日曜、近角先生が講話をして
居られるから、あそこへ行くとよいでせう。然し近角先生
は何時も同じことを何回でも繰り返して話されるが、それ
を聞いて覚えただけでは何にもならぬ。あの同じ話を聞いて、
何時も新らしく聞ける様にならねばならぬ。そこまで
よく聞きなさい」

と勧められた由である。

これは誠に有難い話で、ここひとつといふところを、終生くり返された近角先生と、その味をよく知られた三好先生の開法上の御注意は、聞いた、解つたで浮調子な上すべりをする私共に、真の開法の姿を知らせて頂くによい鏡である。

ここひとつといふところを、終生繰り返された人として禪家では俱胝和尚を想ひ浮べる。俱胝は出家後も悠々とした生活をしてゐると、老尼僧によつて、面罵、痛責をうけ爾来一念發起して大勇猛心をおこして求道したが、遂に大疑団に陥ちた。其時幸にも天竜和尚にめぐり会つたので、一切を打ち明けて教を乞ふと、天竜和尚は、黙つてスウツと指を立てて示した、俱胝はここで忽然として悟つた。

それからは、人が何か仏法のことを質問すると、何に對しても指一本をたてて示すばかりであつた。然し徹底した人の徳は不思議なもので、一切がそれで片付いたのである。

ところが俱胝の寺に一人の童子が居り、和尚の一指頭の禪風を見覚えて、仏法とはそんなものと思ひこんで、他所に行つてその真似をする様になつた。これを知つた俱胝は、或日童子を呼び「いかなるかこれ仏法」と問ふと童子ちにはあらはれて、善導大師の御文「一心専念弥陀名号……順彼仏願故」の一句において、大師の玄意を得られ「余が如きの下機の行法は、阿弥陀仏の法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや」と高声に唱へて落涙千行、一向専修念仏門に帰し給うたのである。

爾来上人の御生涯は、南無阿弥陀仏ひとつに、おのづから定まつたのである。常の仰せにも

「われはこれ烏帽子もきぬ男なり。十悪の法然房、愚痴の法然房が、ただ念仏往生せんとす云々」とある。

また或人の「この世をすぐべきやうは」の問ひに對し、「念仏申されんやうに過ぐべし」とも答へられてゐる。

ことに著しいのは念仏の法難の時である。七十五歳の老上人が四国の諸所に旅立たれた日、集る御弟子方に、念仏の一法を勸化せられた。すると西阿弥陀仏と云ふお弟子が、「今日ばかりは世間を憚つて念仏沙汰をお停止のほどを」と申し出た。その時上人は座をあらためられて「そのこと何の聖教にかある」と問ひかへされ、更に「われはたとひ死罪に処せられるとも念仏の一義はとどむべからず」と誠に居られる。

この時、西阿弥陀仏の念仏は人真似である。死罪、流罪で行き詰る念仏であつた。俱胝に切られた童子の指で、真

はここぞとばかり指を立てた。和尚はすかさず隠し持つた双物で童子の指を切りつけると、童子は真青になつて逃げ出した。俱胝は大声で「小僧！」と呼び、童子がふりかへると、スウツと指を立てて示した。そこで童子は豁然として悟つたといふことである。

其後、俱胝が遷化しようとして大衆に對し「わしは天竜一指頭の禪を得て、平生思ふ存分使つたが、ついに使ひ尽くせなかつた。お前たちもそれを會得したいと思ふか」と言ひ、スウツと指を立てて示し、そのまま入寂したと伝へられる。

汲めば汲むほど真清水がわき出てくるやうに、外から見れば一つの井戸で、同じ釣瓶を動かしてゐるにすぎぬけれど、そこには常に新しい真清水が汲み出されてゐる。ここひとつといふところの味ひはその趣である。

浄土門では、法然上人が「南無阿弥陀仏ひとつ」を御生涯をとほして御勧め下さつてゐる。

上人がそこに心の定まつたのは四十三歳の時であつた。一切経の読破も五遍、南都・北嶺に知識を問はれたけれど、「わが智くらく、わが機及び難し」で、智目行足の缺けた身を悲歎されるばかりであつた。その時、宿善たちま

青になつて逃げねばならぬ念仏であつた。選択本願の大智海から流出してやまぬ法然上人の念仏は、御自らの救ひであるばかりでなく、上人を訴へて処罪する者をもたすげずばやまぬ念仏である。その仏のまことの建現するところ、まことなき我等こそ打ち負かされこそすれ、人の力に打ち負かされる念仏ではない。「法よく人を障へ得べけれ、人なんぞ法をさまたげ得んや」と仰せられる老上人の念仏こそ、尽十方無碍の光の明朗な、南無阿弥陀仏の真面目である。

又、其時、「たとひ肩をならべ、膝をまじへて住すとも、念仏を締としないならば百里千里のへだたりがある」とも申され、「同一念仏のところ、俱会一処の喜びがある」と述べられて地上一時の別離を悲しむ人達を慰めて居られる。

更に、上人の御臨末近き日「御廟所をいかに」とお尋ね申すと「廟所を一所にとどむべからず、念仏の申するところ我廟所なり」と仰せられてゐる。

以上の様に、法然上人の御一生は、四十三歳に念仏一つを聞きひらかれて以来、念仏の息絶え終られるまで、終始一貫、南無阿弥陀仏一つで貫かれ、またそれ一つで自利利他の道がととのひ、大満足せられては、そこひとつを説きに説き、勧めに勧めて下さつたのである。

親鸞聖人は「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せを蒙りて信するほかに別の子細なきなり」と法然上人から聞きとられ、「他力の悲願はかくの如きの我等がため、親鸞一人がため」とこひとつを終生繰り返されて、念仏の息絶え終られてゐる。

曇鸞大師は「彼の無碍光如来の名号は、能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満て給ふ」と讃仰せられてゐる。

我々も亦、ここひとつといふところを、よきひと法然上人から、南無阿弥陀仏の一つに聞きひらかせて頂いて、人間として生れたことの眞の慶びをそこに得させて頂きたいものである。

それには、あれも知つてゐる、これも解つたといふ風な表面すべりで、唯新しいこと、珍らしいことばかりに心ひかれて、聞いて聞かず、遭うて遭はずといふことに終つてはならない。

曇鸞大師は次の文に「然るに称名憶念すれども、無明なほ存して、所願を満てざるは如何とならば、……如来はこれ実相身なり、是れ為物身なりと知らざるなり」と、念仏称名申しながら、心の闇さが残り、何か物足らなさがつきまどふと云ふ開法者にその病根を指摘して居られる。

ここは非常に大切なところである。我等は幸に仏法流布

大 經 結 び の 段

——大 平 和 の 世 界 へ——

これは少しよそのお話をするやうであります。私がもう三十何年も前に仙台に居りました時に仙台の第二高等学校の英語の先生でありましたが、栗野先生といふ面白い方がおいでになりました。その方が四十年ばかりも二高に勤めておいでになりましたので、その時の二高の校長でありましたところのこれは仏教に熱心で近角先生の信仰のお話をずうと深く聞いて居られました阿刀田さんといふ方があります。この阿刀田さんが何とかして栗野先生の記念を二高に残したいといふ事を考へられまして、先生のところへ相談に行かれたさうであります。そしてまあ皆やるやうに先生の油絵の肖像を二高の講堂に残したいと思ひますかと話して見たら「やめてくれ」と仰言る。それぢや先生の胸から上の銅像をこしらへてそれを校庭に記念においては如何でありますかと云ふと「なほいやだ、そんな事すつかりやめてくれ」さう仰言る。そんな事を云つて散々押問答した揚句栗野先生が「観音様でも置いとけ」と云はれたさうであります。それから阿刀田校長その栗野先生の言葉

の日本に生れ、南無阿弥陀仏を、目に耳に口に、或は挿み聞き称へたことのない者は殆んどないといふ恵まれた環境に生をうけてゐる。それなのに、どうも念仏がしつくり身に頂けないのは、尽十方無碍光如来は実相身、即ち自利圓滿の仏身であり、そのまゝ我等を救ひ遂げんが為に現れて下さつた為物身、即ち他圓滿の徳を成就せられた我等の爲の仏身と頂けないためである。

法然上人の上で申せば、叡山や黒谷での修業の時は、理仏の探究であつた。さうした一切の駄目さに気付かれて

「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや！」

と、我御身の上に南無阿弥陀仏の大行を頂かれたところが為物身の大悲の徹到されたところである。そこにおのづと破闇滿願、疑雲永晴の随喜と、無窮無限の大活動が湧然とおこつたのである。

秋結岸の日、完了。

福 島 政 雄

をすつかり摺んだといふのであります。それで先生にわからん様に計画を始めまして、大和の法隆寺のお隣中宮寺にお参りして中宮寺の御本尊を拜んで、これは実にいゝ、この御本尊を象つた観音様の銅像を一つ作つてもらはうと美術家に相談をして、すつかり手筈が整うてその観音をこしらへる事になつた。それからその事を栗野先生に云はれましたさうであります。栗野先生今度は非常にお喜びになつて、それからいよ／＼その銅像が出来まして、私は大きな石の上に据えられてあつた銅像の下で、阿刀田校長からその因縁のお話を聞いたのであります。いよ／＼出来て先生の所に伺つて、先生は観音の像でも置いとけと仰言つたのはどういふお心持でございますかとお尋ねしたところが、「今のガキ共は喧嘩ばかりしてゐるからナ」と仰言つた。それから阿刀田校長としては、これはキリスト教の人が仰いても非常にいい感じのするものを作り度いといふのでその観音様といふことにしたといふ様なお話を聞いたのであります。この栗野先生といふ方はキリスト教でも仏教

でもない方でありましたけれども非常に穏やかな気分の方でありました。よく面白いお話をする方でありまして毎日教員室でお話をなさる事は大い同じことを繰り返してなされるのでありますが、皆さんがお聞きになるとどうであるか知りませんが、お釈迦様が一番損だつたと仰言るのであります。それからキリストが一番損だつたと、それはお釈迦様は三千の宮女を相手にしてそれから王宮を出て修行して悟りをお開きになつたと、キリストは一人の女も知らないで三十才ばかりで磔刑になつたと、一番損だつた、こんな事を毎日の様にお話される、けれど面白いから私共若い時で教員室で毎日あの先生のお話を聞いて居りました事であります。併しその記念の観音像の事を考へそれから栗野先生に接した感じの上から申しますと、非常に平和な気分の方でありました。これは万巻の書物を読んで居られた方でありました。英語は勿論ドイツ語フランス語それから漢籍なんかも自由に読まれた方であります。さういふ方でありました。

その事なんか思ひ出しまして、人間の世界に本当の平和をもたらずといふものはどういふところから来るのだらうといふ様な事を考へ、観音様、仏様の慈悲の象徴と申しますか、仏様のお慈悲を顕すところの観音様の像を仰ぐ、これがやつぱり仏教だ、キリスト教だといふ事を云はないで、やつぱり皆の心に平和の心持が自然に湧き起るといふ

様な事になる様でありますといふ様な事を思ひますのであります。それは何も御信心のお方の例ぢやありませんけれども実に面白いお話を私思つてゐるのであります。實際世界の平和といふものは、キリスト教だ仏教だ、と云つて又それが角突き合ひをして居つては又駄目なのであります。阿刀田校長がその時しんから云はれました事は、「どうも自分は仏教だキリスト教だ」と云つてゐる人を見てゐるとお互に我を張つて、そして角突き合ふ様な気分があるやうだ。栗野先生の様な方は実にどの宗教といふ事はないのにあんな平和な心持を持つた方はない。それだから観音像を栗野先生の記念にこゝに建てるといふ事は非常に意義があるんだ」と一生懸命にお話しになつた。その時の阿刀田校長の姿、熱心さ、そのお話の言葉が今尚この私の心に響いて来る様であります。

それはちつと余談になりましたけれども、釈尊のお心持といふものは何としまして一切衆生、世界万国の平和といふものがこの仏の真を一人々々が身に受けるといふところから開けて来るものであると、かういふ風に釈尊はお考へになつてしんからこゝをお説きになつてゐるのぢやありませんでせうか、といふ事を思ひますのであります。非常にこゝは明るい有り難いところでありますが、併しそれは今の様に一万年後の理想といふわけではなくて今日私共の心の上で開いて下さる、そしてそこから何時の間にか平和のそよ風が吹いて来るといふ様な、さういふ所でありませうと思ひますのであります。(つゞく)

祖父の形見(二)

田中克巳

一、一心一向といふは、雜行すて、弥陀をたのむこと也。凡夫のこの心のちりみだれるのをとめて、此心を如來さまの方へばかりむけて、仏様を念ずると云ふやうなことが、もしてできるくらゐならば、五劫永劫の御苦勞はいらぬことぢや。此心は画水の迷情というて、我身ながら愛想のつぎる、なさない久遠劫来の地獄行ぢや。そこで此心をつくらうて、よい香ひをつけて助からうをやめて、このおちだましいをおめあてに、よんでくださるおじひに向ふのぢや。何も彼も重荷は親にあひせかけて、てぶらでやれ〜と悦んでをるすがたが一心一向ぢや。御当流の御安心程勿体ないものはない。

(註) 雜行すてるといふも、弥陀をたのむといふも、一心一向といふも、助けたまへといふも、皆同一意義を各方面よりのたまひたるなり、微塵程も凡夫迷心の所作をかるにあらず、全く他力にて御助けくださる御事なり。捨機托法、一心帰命、たすけたまへ、皆これどうもせぬ味なり。唯で助けてくださるなり。唯安心して御恩悦ぶばかりなり。

一、弥陀をたのむといふこと、いつまで聴聞しても安堵が出来ぬ、放逸無慚で仕様仕方のなき此機を、其儘かならず助くるぞよの御勅命に信順し、おしたがひ申すのぢや。弥陀をたのむのうらは、そなたの心をあてにしてをつては、いつまでたつても埒あかぬぞよとの御心ぢや。おつるものを必ず救ふの御勅命を聴聞しながら、私はどうもたのまれぬ、安堵が出来ぬと思ふは、御勅命を聞かぬのぢや。弥陀をたのまうと思ひつゝ、まつ我が迷情をたのみかけてをるのぢや。

(註) 安心して悦ぶは衆生心の所作にあらずして、大満足なり、仏智満入自然の勢なり。可味。前段の、よろこばれねば往生一定とあるは、これ程大なる安堵心はあらず。大安堵心は大慶喜心ならずや。

一、寺へまゐりて、高座のもとで聴いてをるあひだはありがたく思ひ、往生一定のやうに思へども、御門をいづれば

はやなんともなくなり、心はちりみだれて、うれしかつた色も香もなし。夜のねぎめにしづかにかんがへてみると、御信心のほひも知らず、後生はまつくらで、たすかりさうなところは微塵もない。唯もうさびしい、あじきない思ひがする。そこで御信心が頂きたい、はやう安堵の身になりたいたと、あせるのである。が親様の方の御ころでは、その寺へ参つてよろこばれる殊勝になつた心はおたすけの目あてではない。門をいづればはやなんともない散乱放逸の心、夜中思ひだして、気持ちのわるい、たよりない、どうでも地獄におちねばならぬの難儀な心を、必ず引受くるで安心せよとの御本願ぢや。それにまだよろこばれぬ、なんともないから助かられぬと強情を張るが、凡夫がなんほ強情をいひ張つても、たつた五十年しかいふことは出来ぬが、仏は無量寿の御命を以つて、そのなんともないものを助くると、よんでくださるから、遂にかなはんではないか。

(註) 直指西方と、直に西方を見よと指さし教ふれども、いかなる人も必ず一度は指さす西方を見ずして、先づ我が手もとを見る、是れ久遠劫来の迷ひの因なり。

一、廻心懺悔といふこと、極道者が改心したといふことと、よく似てうらはらぢや。改心したのは今まで悪をして、人に難儀をかけたことを悔いて、善に遷るのぢや。廻

がちがふ。上官の命令は、満洲に出征せよなれば、大儀でも満洲に出征せねばならぬ。今、仏の御勅命は、凡夫の嫌ひなことをなせとすゝむるにあらず、無善造悪のこのなりを、仏力で必ず仏にするの仰せぢやから、私は今の無善造悪のなり御助けに預るのが信順なり。私にはなんにも仕事はない、唯安心して悦ぶばかりぢや。軍人の方は命令と服従とは二つぢや、別々ぢや。こちらは別々ぢやない、二つでない御勅命そのまゝが信順ぢや。なぜに仏の勅命が我等の信順ぞといふに、たとへていへば此処に寝てをる人がある、その人に寝てをれよと言葉かかりたりとすると、その言葉を聴いて、もとのごとく寝てをるまゝが言葉にしたがうたのぢや。地獄ゆきの悪人を必ず助くるの御勅命であるから、仏さまにはそむいてそむききつてをるなり、なんとも思うてをらんなり、どうもせぬなり、生れたきぢや、地獄行のなり、助けらるゝが御勅命に信順したのぢや、おしたがひ申したのぢや。歎ぶ身になつて、安堵して、御信心を得て、御たすけにあつかうと思ふは、すこしも仏勅が聞へてをらんではないか。御勅命におしたがひするといふことが、善心になれといふことであつたならば、この悪人はとても往生はかなはんに、仏さまにはそむいて、地獄行の業を積み重ねるまゝが御勅命に信順した、未來永劫の大果を得る御信心とは、まことに何ともいひやうも思ひやうもない、広大の御慈悲ではないか。

心懺悔は、どうぞ仏さまの御氣にいるやうになりたい、よるこばれるやうになりたいと、しきりに善人にならうとしてをつたことを悔いて、やれ／＼わが身はかゝるねうちなしと、いままで知らなんだことのはつがしやと、もとの悪にたちもどつて、悪人正客の慈悲にうちもたれるのである。

(註) 廻心懺悔は一期に一度はかならずなければならぬと聞いて、どうかせねばならぬことかと思ひしに、雑行すて仏をたのむこととなり、一心一向の味なり、助けたまへと申す心なり、どうもせずに御助けに預る心なり。

一、発願廻向といふは、罪業深重の私の往生を、必ず引受くるとある如来様の御勅命ぢや。此の御勅命を聞いて、さてはかゝる機までも御助けと悦ぶ信心は、私のこしらへたのではない、親の必ず救ふの御勅命で、私の往生の行を御廻向に預つたのぢや。ある軍人が、今度戦地へ出征するにつき、訊れにその寺へまゐりたとき、御勅命に信順したてまつるが南無婦命ぢや、丁度あなたがた軍人が、上官の命令は天皇陛下の御命令なりと心得、如何なることにも服従せねばならぬ如く、仏の我をたのめ、必ず助くるの仏勅におしたがひ申して、往生の一大事をおまかせまうすのが、当流の御信心ぢや、とお話があつたさうな。が、それではすこし合点がゆきにくいではないか。軍人が上官の命令に服従するのと、我らが仏勅に信順するのは、大いにその趣

(註) 御助けに預るとは助けらるゝことなり。

服従は大なる所作なり、信順は所作を離るゝなり。能所不二なり。

信順は所作にあらずして、大安堵心なり、大慶喜心なり。

仏勅即衆生の大安堵心なり、大慶喜心なり。

仏勅即信順なり。

一、人によると、阿弥陀仏は一体どこにあるか、遠きところか近きところか、西方の阿弥陀仏をたのんだか、お内仏の阿弥陀様をたのんだのかなどといふ人がある。けれど、阿弥陀仏とは他のことではない、地獄一定の悪人の私を必ず助くるで安心せよの御本願が御六字様ぢや、南無阿弥陀仏様ぢや。かゝる造悪の私が、さらに悪報を恐れず、極楽にまられることと思はせてくださる信心は、仏心が宿つてくださったのぢや、やはり南無阿弥陀仏様ぢや。

未完

編集後記

いよ／＼みのりの秋が参りました。この時、近角常観先生の求道誌に発表せられました御講話を、慈光誌に転載させて頂けることになりました。これには福岡市の齋巻政次郎さんが、近角真観様にお願ひして下され、御快諾を頂いたのであります。想へば先生の十七回忌の年、先生の生ける御声を再録させて頂き得ますことは只事ならぬものを感じます。

今一つは今回池山先生の意識歎異抄が出版せられましたにつき、池山敏朗さんから「印税を私するに忍びないから、慈光誌の後援費に」との御申出を頂きました。このことも私には感無量なものを覚えます。期せずして、相前後して、両先生の御令息を通じて、慈光誌の上に冥助の御手をさしのべて下さいました。私といたしましては感激にたえぬことでありませう。

嘗ては洞爺丸遭難の時は、遭難者に池山先生の御孫様が居られ、炭伕側の救援隊長に近角真観様が居られ、この惨事を縁としてそこにひかる仏縁の不思議さに驚いたことがあります。すなわち簾垂の内側からは外がよく見えます

が、外側から内は見えませぬやうに、私共には見えませぬが、向ふ様はよく見抜いて下さつて、慈悲の御手を延べて下さるのであります。

▽「親鸞聖人の德音」は三回に分けて頂きます。

聖人の七百回忌の程近くなりますにつけても、六百五十回忌にめぐり会はれた先生の感動をお聞き申しませう。

▽「大経結びの段」はとくに平和な世界を独特な世界からお示し下さいました。平和々々と呼称しながら戦争が続く如く、宗教者の生活も我他彼此の続くことは深く省みさせられることでもあります。東京都調布市仙川町七九四番地。

▽「祖父の形見」の田中さんの原稿も次回に続きます。五十年前のお言葉になつて居りますが、内容は新鮮な法水の流れて、御味読願ひます。「田中さんの原稿は有難いですね」と白井先生も随喜して居られました。

▽「ここひとつといふところ」とは変わった題になりましたが、私自身への反省の技折りといいたしました。

御案内

○第一、第二、第三日曜。午后一時半。日曜講話。於一道会館。

市電、新効通一丁目下車、東へ一丁名鉄、呼統駅下車。徒歩二十分。省線、笠寺駅下車。

○毎月廿四日、午前、午後、法話会。昭和区小桜町。教西寺。

○一道会。十一月三日。京都市右京区山田開町、淨住寺。白井成允先生、講話。新京阪「桂」乗換「上桂」下車。

定価 一部 十七四（送共）

半年 百四（送共）

一年 二百四（送共）

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区匠上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第九卷第十号昭和三十三年十月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可